

原田種成著「私の漢文講義」大修館書店 1995年10月1日刊を読む

堯舜説話

1. 古代中国の理想政治

(2) 漢文教科書の歴史教材に、中国古代の理想的社会を描いたものとして『十八史略』の堯舜説話である「鼓腹撃壤」の条を採りあげることが多い。

(2) 堯舜説話は、いうまでもなく伝説であるが、そこには中国人の理想とした政治形態が描かれている。古代中国を理解する上で重要な問題をたくさん含んでいるから、それを押さえて鑑賞することが望ましい。

P122

2. 童謡と撃壤歌

(1) 堯は天子として天下を治めること50年、いったい天下はよく治まっているのか、いないのか。人民たちは自分を天子として戴くことを願っているのかいないのか、わからなかった。左右の近臣に問うてもわからず、外朝の臣下たちに問うてもわからず、民間の士に問うてもわからなかった。そこで微服して町の大通りへと出かけた、と記したあとに童謡を聞き、老人の鼓腹撃壤して歌っているのを聞いたとあるだけである。いったい、堯の疑問はどうなったのか、堯は天下の治不治がついにわからなかったのであるか。『十八史略』の文にはその答が記してない。

(2) それを、童謡はどういうことを歌っているのか、老人の歌の意味するものは、と問いかけるだけではこの説話の真意をとらえたことにはならない。

(3) 堯は治まっているのか、いないのか、だれにもわからなかったから、その手がかりを求めて微服して町へ出かけ、そこで童謡と老人の歌を聞いたのである。だが、堯はいったい、わかったのか、わからなかったのか。そのを考えれば、自然と童謡と老人の歌の意味しているものの答も出てこなければならないはずである。

(4) ここは、堯はこの二つの歌を聞いて、自分の望んでいる通りに天下がよく治まっていることがわかったのであると解したい。つまりこの二つの歌が、堯の疑問に対する答になっているのである。天下を治めることが50年であるのに、治まっているか否かがわからないというわけは、実際は非常によく治まっていたために、このようなのが治まっている状態なのであるのか、本当に人民が天子として歓迎しているのか否か、わからなかったのである。つまり、平和ということは動乱・戦乱に対して言われることで、動乱・戦乱が全くなければ、平和の状態があたり前で、ことさらに平和ということを使う必要がないのと同じである。また、水が不足するから水を意識したり、ありがたがるのであって、水が豊富であれば、つい、水が大切であることを忘れているのと同じである。

(5)童謡の「爾なんじの極あらに匪あらざるなし」とは、つまり、「兵隊さんのおかげです」ということと同じで、「自分たちが平穩に暮らしていけるのは、堯のおかげです」と感謝しているのである。

(6)老人の歌は、「自分たちは日が出れば起き出し、日が沈めば寝る。井戸を掘って水を飲み、田を耕して飯を食っている。自分たちにとって天子のおかげなどは少しもない」といっている。つまり、太陽や空気の恩恵を意識していないのと同じである(ここの「作」と「息ソク」とは音読したい。「作」を耕作の意と解するのは、後の「耕田而食」と重複する。『十八史略』の二巻本(足利学校遺蹟図書館蔵の明初刊本)の注に「作、興也」とあるから、ここは「太陽が出ると起き出し、太陽が入ると寝る」と解するほうが原始時代の生活にぴったりする)。

(7)儒教思想においては「黄帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる」(易、擊辞下)という無為の治を理想としており、このように人民から天子の存在を意識されないような政治こそ理想の政治であり、この二つの歌を聞いて堯は自分の望む通りに天下がよく治まっていることがわかったのである。この説話の結論はこの二つの歌である。

(8)為政者が東奔西走、心魂をくだいて世を治めるのは下手な政治で、無為にして治まることこそ理想の政治と考えていたのである。そうした政治理想が生んだ説話である。

P124 ~ 126

[コメント]

理想の政治が無為の政治か否か議論があるだろうが、現代であればハイエクの自生的秩序を目指すべきということか。心の平安、普段の生活の安定が何より大切ということは、いつの世も変わらない。

- 2010年5月30日 林明夫記 -